

新情報システム学体系化研究・第1回講演会の開催報告

2014年9月30日

新情報システム学体系調査研究委員会

◆日時 : 2014年9月17日(水) 18:30~20:40

◆場所 : 専修大学神田校舎大学院棟7号棟772教室

◆テーマ : 「人間学アプローチから見た情報システムのモデリングの新視角」

◆講師 : 株式会社豆蔵 取締役CTO 羽生田栄一氏

◆参加者 : 19名

◆ご講演の概要 :

・講演趣旨

今回、第1回目は情報システム学の最上流に位置付けられるモデリングをテーマに、株式会社豆蔵・羽生田様から、ご高話頂いた。

社会とITの関係が大きく進化した今、情報システムの捉え方も大きく(とはいえ本来の姿に)変わっていくと考えている。ここでは、世界をシステムにマッピングするモデリングの位置づけを見直し、モデリング行為や情報システム自体が埋め込まれた社会の中での人間活動としてITを使いこなした社会改善活動プロセスとしての情報システムとそのモデリングについて考える。その際、川喜田二郎のW型プロセスおよびヴィゴツキー/エンゲストロームらの活動理論をヒントにしている。

・講演で強調された点

ー情報システム取組が変化してきている2つの特徴的な例を紹介された。

東日本大震災の復興を継続的に支援するためのIT開発者のコミュニティ「Hack for Japan」と支援例、および、グラミン銀行創設者であるムハメド・ユヌシ氏による、社会の問題解決が目的(ソーシャルビジネス)の事業取り組み例。

ーITを取り巻く環境は激変し、グローバル化社会の多様性を支えるインフラになり、社会変革の武器としてITが使われ、それがビジネスになってきている。

また、現代のSW開発では、ソフトウェアエンジニアは今までのようなOJTで経験から学ぶだけでなく、今後体系的なソフトウェア工学の基本とアジャイル型コラボレーション型ワークスタイルが必要になってきている。

トム・デマルコ氏もこの変化を認知し過去のソフトウェア・メトリクス賛美を悔い改めている。

ーこれから(現代)のシステムやプロダクトへの要求は以下のように変化してゆく。

従来の観点 : 目的を満たす(局所的目的論)、ちゃんと動く(狭義のシステム論)。

これからの視点 : 個人にも社会にも有益である(広い目的論)、社会が受容し持続できる(広いシステム論)、美しい(新しい美学)。

ー上記の変化や要求への対応には次のような新しいアプローチが必要である。

フィールドワークとプロトタイピングを駆使し、フィールドに応えてもらうようにしてゆく。そのために、アジャイル手法のIT外への使用、リーンスタートアップ、デザイン思考などの活用が重要である。

ー羽生田氏が考案、提言するWプロセス2.0の内容について、丁寧に説明された。

これは、川喜田二郎氏のKJ法を羽生田氏が大幅に改訂しており、現象学的態度と身体知的態度と集合知的態度のコラボレーションによる方法論体系を考案された。特に集合知を語る言語として、パターンランゲージを洗練させながら活用してゆくことがこれからの重要テーマである。

ー暫定的な結論として、社会にコミットする覚悟を持ち、タイムスケープと変化を自覚し、本当にやりたいこと・すべきことだけを行うこと、そして、チームでのワーク、右脳の活用、全体感を得る手段の活用を挙げられた。

ーそして、新しいリーダーシップ（学習する組織）を目指すことを唱えられた。

内容は、以下の3点である。

目的を共有して、一緒に考えながら進んでゆこう

「一人ひとりが主体的に問題解決し、仕事を改善する」ことができるように育成する。

一人ひとりに権限と責任をできる限り委譲し、人間として仕事し、「顧客価値」と「組織成長」の両方に仕事を整合させられる。これらが可能である場創りが仕事である。

・質疑応答では参加者の多くから活発な質問がなされた。

集約すると、これからのIT技術者にはコンピュータ言語よりも自然言語に近いパターンランゲージのスキルが必要になってくる。

Wプロセス2.0での事例は全体としてはこれからであるが、部分的には出てきている。今後、紹介の機会を持てればよいと考える。

全体として、多角的な視点で大きなスケールで構想を述べられていて、今後IS学を体系化してゆく上で大いに参考になる講演であった。

◆問合せ先

<新情報システム学体系調査研究委員会：渋谷照夫>

e-mail: shibu_t4771@kym.biglobe.ne.jp (■を@に置換えてご使用ください。)

以上